

李舜臣と文禄・慶長の役の海戦に関する考察

Some Notes on Admiral Yi Sunsin and Naval Battles in Imjin War

環太平洋大学名誉教授

小川 隆章

OGAWA, Takaaki

Emeritus Professor

International Pacific University

要旨：豊臣秀吉による2度の朝鮮出兵（文禄・慶長の役、壬辰倭乱）に際して、朝鮮半島南部の海域で朝鮮水軍を率いて数々の勝利を挙げた李舜臣は韓国及び日本において人気の高い武将である。しかし、彼が海戦の勝利によって「制海権を保持した」とか、「日本軍の補給路を断った」とまで記述されているのは大げさであるように思える。本稿では史料・文献を精査したところ、日本の陸上軍が首都・漢城へ、さらに逃げる朝鮮国王一行を追って平壤へと進撃するのに合わせて日本水軍は海上を進み朝鮮西海岸を北上して、陸軍への補給をするという「水陸併進策」があったと多くの著作で主張されるが、それが真実かどうか、が重要であるようにみえた。李舜臣は一回目の侵攻（文禄の役）で日本水軍を閑山島海戦等で破り、この水陸併進策を挫き、2度目の侵攻（慶長の役）では鳴梁海戦でやはり水陸併進策を挫いたとみなされているようである。本稿ではこの水陸併進策について疑義を呈し、史料・文献を精査して考察を行った。

キーワード：李舜臣、文禄・慶長の役、水軍、水陸併進策

I・本稿の主題

たまたま岡本隆司著『世界の中の日清韓関係史 交隣と属国、自主と独立』を見たところ、文禄・慶長の役に関して、

「はじめ、破竹の勢いで朝鮮半島を席卷した日本軍は海上で朝鮮水軍に敗れて、制海権を奪われ……」（p.22）という記述に出会って驚いた。ほかの文献を見てみると、武田幸男（2000）『朝鮮史』では、「しかし、海上では、亀甲船を用い地形や海流を巧みに利用した李舜臣の水軍が、終始日本軍を圧倒して制海権と穀倉地帯の全羅道地方を確保し、日本の兵員や軍糧の補給計画を挫折させた……補給路を断たれた日本は……全兵力を南下させて」（p.193）の記述が出てくる。

水野俊平（2007）『韓国の歴史』では「船による補給路も李舜臣らの水軍によって絶たれた」（p.107）という。

確かに李舜臣率いる朝鮮水軍の活躍は目覚ましい。一回目の侵攻（文禄の役）では全羅左水使（全羅左道水軍節度使）の李舜臣が元均、李億淇とともに日本の軍用船を朝鮮南岸で次々と沈め、勝利した。し

かし、「制海権を完全に奪い、補給路を遮断した」とはいえないだろう。足掛け7年の間、結果的には肥前名護屋-釜山を結ぶ補給路は一度も断たれていない（注1）。

それなのに、なぜ、「制海権を奪い、補給路を断った」といわれるのか？それはどうも、日本軍に「水陸併進策」があって、“本来は日本の水軍が朝鮮南岸を西に進み、さらに半島の西海岸を北上し、江華島付近から漢江を遡行し首都漢城（ソウル）に、さらに、西海岸を北上し、大同江を遡行して平壤に至った小西行長の軍勢に補給を行う、という作戦があった。全羅左水使の李舜臣が根拠地麗水（全羅左水營）から東側の慶尚道の海域へと4度の出撃を行い、日本水軍を海戦で撃破したため、この水陸併進策が挫折した。全羅道・忠清道等の海域が守られて日本軍の補給が続かず、朝鮮侵略が挫折した”，と見なすからではないだろうか。本稿ではこの問題を検討したい。

II・本論

李舜臣の活躍は韓国の歴史教科書に必ず強調される。韓国中校歴史教科書（三橋広夫訳『入門韓国の歴

史——国定韓国中学校歴史教科書』明石書店2001年)では、

「朝鮮軍は、陸地での惨敗と異なり、海上では至る所で倭軍を殲滅した。当時倭軍の作戦は、北上する陸軍を支援するために水軍を南海と西海へ北上させて、戦争物資を調達し、陸軍と協力して攻撃しようとするものであった。そこで日本水軍は、慶尚道の海岸を略奪しつつ全羅道海岸へ接近してきた。当時、全羅道の海岸警備を任されていた人は、李舜臣であった。かれは戦争一年前に赴任し、今後あるかどうかもわからない倭軍の侵入に備えて、亀甲船を作り、戦艦と武器を整備し、水軍を訓練して兵糧を蓄えるなど万全の準備をした。このように準備を重ねた李舜臣は、倭の艦隊を迎え、南海岸各地でこれを撃退した。朝鮮水軍は、玉浦海戦で最初の勝利を挙げた後、つづいて唐浦、唐項浦、閑山島、釜山浦などつづけて大きな戦果を挙げた。特に閑山島大捷は、朝鮮軍の挙げた最大の勝利で、壬辰倭乱当時、大きな成果をあげた三大捷のひとつに数えられている。このように李舜臣の活躍で、朝鮮軍は制海権を掌握し、倭軍の本国連絡路を遮断し、全羅道と西海岸を倭の侵入より守ることができた」(p.198)と述べる。

高校の教科書でも李舜臣が日本軍の水陸併進作戦を挫折させたことと記述されている。大槻健ほか訳『世界の教科書シリーズ(1)新版韓国の歴史・国定韓国高等学校歴史教科書』(明石書店2003年)では、

「陸地では戦勢は不利だったが、慶尚道、全羅道の海岸警備を担当した水軍は、倭軍の兵站支援を受け持った日本水軍の侵略を阻止した。倭軍の侵入の1年前に全羅左水使に赴任した李舜臣は、倭軍の侵入に備えて板屋船と亀甲船を作り、戦艦と武器を整備し、水軍を訓練し、軍糧米を貯蔵した。彼は倭軍が釜山に上陸すると、80余隻の船をひきいて玉浦で勝利を収めた。つづいて泗川、唐浦、唐項浦等でも大勝した。ついに閑山島の大勝で南海の制海権を掌握し、穀倉地帯の全羅地方を守り倭軍の水陸併進作戦を挫折させた」(p.210)と記述する。

韓国放送通信大学校歴史教科書(宋讚燮・洪淳権『世界の教科書シリーズ⑨概説韓国の歴史』明石書店、2004)でも、

「朝鮮水軍は海上で完全に主導権を握り、敵の水陸両面作戦を崩壊させることができた」(p.204)と述べる。

これらの記述にみられるように、韓国の歴史では日本軍が水陸併進作戦を展開しようとしていたことが指

摘されている。この日本軍の水陸併進策があったとされる説を最も早く書いたのは当時、朝鮮王朝で左議政(副首相)さらに領議政(首相)を務めた柳成龍の『懲毖録』であろう。小西行長は明国との国境の鴨緑江の岸・義州に逃れた朝鮮国王宣祖を追って平壤に至り、「日本の水師十余万が、また西海から到来する。大王の竜御は、ここからどこへ行かれるというのか」と書簡を送ったという。「思うに賊はもともと水陸の軍勢を合わせて西下しようとしたのである」(p.142)と、これを以て柳成龍は日本軍に水陸併進策があったと受け取ったのだ。

しかし、この小西の言葉は外交上(戦略上)のブラフ(ハッター)であろう。このあと、明国の遊撃将・沈惟敬は小西に書簡を送って、「まもなく40万の明兵が出動し、日本軍の前後を遮断する。今、二人の王子を還し撤退すれば、明日から和議の使節を派遣するだろう」と伝えた(関周一、p.154)が、実際に明から朝鮮に派遣された軍勢は4万8千であった(李啓煌、p.109)。沈惟敬もブラフを使ったのだ。こちらの発言は忘れられているのに、なぜ小西の発言のみが独り歩きしたのか。それは、懲毖録の影響ではないか、と思う。李舜臣を中心とした文禄の役の海戦の勝利、慶長の役での鳴梁海戦の活躍をいずれも日本軍の水陸併進策の打破と解釈したからではないだろうか。

ここで1度目の侵攻(文禄の役)における朝鮮水軍の海戦を一通り見てみよう。

まず、文禄元年(天正20年が12月8日に改元)4月の小西行長らの日本第1軍が釜山に上陸、釜山鎮を攻囲すると慶尚左水営(釜山佐自川)の司令官である左水使朴弘は戦わず水営を放棄して逃亡した。朝鮮水軍の軍船は一隻も手向かわずじまいだった。慶尚右水営(巨濟島吾兎浦)の水使の元均は日本軍が巨濟島に向かっているとの誤報を受けて、部下に水営を守らせて、4隻の船で慶尚道・全羅道の境の露梁津へと退避した。漁民の船を日本の軍船と誤認した右水営の守兵1万もパニックになり、驚いて潰走し敵に奪われまいとして兵船百余隻と軍器を海中に沈めたという(李炯錫『壬辰戦乱史上巻』(p.345)。

西隣の全羅道のうち麗水の左水営の李舜臣は元均からの救援要請に当初は管轄が違うので、朝廷からの指令が無いうちは出動できない、としていたが、部下たちから慶尚道の水域へ出て敵を討てば自ずから我が水域も守られる、と出撃を支持する声に押され、また朝廷から宣伝官が到来して出陣を促され(李炯錫、上巻p.464)5月4日、出撃した。元均の残存艦船も合流

し、5月7日、巨濟島玉浦、同日の合浦、5月8日の赤珍浦で日本の船団を襲撃した。第2次出撃では5月29日の泗川、6月2日の唐浦、6月5日の唐項浦、6月7日栗浦と合計7度の海戦はいずれも兵員及び軍事物資を陸揚げした後の日本の船団が慶尚道の各港に停泊していたところを襲撃したものだ。唐項浦の海戦では、日本の船は「南無妙法蓮華経」の幟を立てていたという。すなわち、加藤清正の軍勢の船であった。清正とともに戦闘員はほとんど上陸し、都へと進撃し、さらに北上し、遂には朝鮮半島北東部の咸鏡道、オランカイと言われた女真族の領域まで侵攻していった。残った人員は船の乗組員（水主）とごく一部の守備兵だったのであろう。

以上7回の子海戦の敗戦が秀吉に報告されると、九鬼義隆・加藤嘉明・脇坂安治の3人に対処を命じた。都近くにいて、秀吉の渡海と漢城進駐に備えて、伝えの城館を造営していた脇坂ら3人が、急遽、船に戻り朝鮮水軍を退治するよう指令を受けた。3人はそれぞれ釜山へ赴き、戦支度を整えて出撃した。脇坂は先に準備完了すると、まだ準備中の2人を置いて、自分だけで出撃してしまった。これに先立つ5月28日～6月6日、都近くの竜仁において、脇坂は朝鮮軍5万を撃退するという勇猛さを見せた（李焜錫、上巻、p.519）。そのため、朝鮮水軍を甘く見て居たものらしい。李舜臣・元均・李億岐ら朝鮮水軍は閑山島沖に鶴翼の陣でこれを捕捉し快勝、脇坂勢は惨敗を喫した（閑山島海戦）。

「こうして脇坂の日本水軍は全滅した」と中里紀元（1993、p.344）は記すが、これは言い過ぎだろう。翌年5月、脇坂勢は900人で加徳島に駐屯（金泰虎、2002）し、翌6月の第2次晋州城攻囲戦に1000人で参陣している（李焜錫、中巻p.256）。淡路島の洲本で3万石の知行の脇坂安治は1500人が動員されているので、閑山島海戦を含め、朝鮮での死亡・負傷などで戦力外となった者が500～600人ほどと推定される。

脇坂に先を越された九鬼と加藤嘉明は急ぎ後を追おうとしたが、脇坂の惨敗を知ると近くの安骨浦へ入り、勝ちに乗った朝鮮水軍は安骨浦に押し寄せ「安骨浦海戦」となる。ここでは閑山島海戦ほどの惨敗は免れたものの、多くの船を焼き討ちにされ、朝鮮水軍の強さを思い知らされ、釜山へ逃げ帰るのであった。

上垣外憲一（1989）『空虚なる出兵－秀吉の文禄・慶長の役』ではこの閑山島海戦の結果について、「日本軍は59艘の兵船を失い、かろうじて逃げおおせたのは十余艘に過ぎなかった。朝鮮側の損害はわずか

4艘。朝鮮水軍の完勝である。閑山島海戦と呼ばれるこの戦いで、朝鮮南岸の制海権は完全に朝鮮水軍の掌握するところとなる。李舜臣は三道水軍を合わせ指揮する統制使に任命され、日本水軍の西行の道を抑えることになる。日本軍が開こうともくろみた西海岸を北上する道はこうして閉ざされ、全羅道、忠清道、江華島など、西海岸側の確保するところとなった。海の航路を確保出来なければ、たちまち補給に事欠くようになる。兵糧の不足が、日本軍を深刻に苦しめることになるのである。」（p.119）と述べる。日本軍が西海岸を北上して補給が必要だったとするが、これはどうであろう。次の釜山浦の海戦が成功しないと日本軍の補給の遮断はできたとはいえないだろう。日本軍の物資は釜山に陸揚げして、内陸路を補給していた。補給を妨げたのは各地の義兵（ゲリラ）による襲撃だったといわれる。

柳成龍『懲毖録』は前述のように「これより以前、平（小西）行長は平壤に到着するや、書簡を寄せて、「日本の舟師10余万がまた西海から到来する。大王の竜御はここからどこへ行かれるというのか」と言ってきた。思うに、賊はもともと水軍の軍勢を合わせて西下しようとしたのであるが、この一戦（閑山島海戦）によって遂に賊の片臂を断ち切ったので、行長は平壤城を獲得はしたものの、その勢力は孤立しており、敢えてそれ以上前進しなかったのである。（中略）李舜臣はこうして三道の水軍を率いて閑山島に駐屯して、賊が西方を侵犯する路を遮ったのである」（p.142）と記す。李舜臣自身がやはり柳成龍と同じように考えていたようだ。丁酉年（慶長2年）の漆川梁海戦によって元均率いる朝鮮水軍が壊滅的敗戦を経験し、李舜臣失脚の後の後任の統制使元均、全羅右水使李億祺、忠清道水使崔湖らが戦死し、慶尚右水使裴叟のみが率いる12隻の船を以て逃げた。朝廷では敗報を知ると統制使に李舜臣を再任した。李舜臣が水軍の再建に取り組む。朝廷では水軍の船も兵士もわずかであることから、李舜臣に水軍を廃して陸軍に合流して陸で戦うことを命じた。このとき、李舜臣は、「啓して曰く、壬辰より五六年の間に至るまで、賊敢えて直に両湖（全羅道と忠清道）を突かざるは、舟師の其の路を扼する以てなり。今ま臣の戦船尚十二あり、死力を出だして拒戦せば、則ち猶為すべきなり。今ま全く舟師を廃せば、則ち賊の幸ひと為す所以、而して湖右（忠清道）より漢水に達す。此れ臣の恐るところなり。戦船寡なしと雖も、微臣死せざれば、則ち敢て我を侮らず」と上啓して、海で戦うとことを承

認された（徳富蘇峰『近世日本国民史』9巻, p.405）のだ。

笠谷和比古・黒田慶一（2000）『秀吉の野望と誤算』（p.115）も、「李舜臣の水軍の目覚ましい活躍は、ただ秀吉軍の戦意を挫くのみならず、その補給路を断つことによって秀吉軍に決定的な打撃を与えていた。すでに述べたように、秀吉軍の全国平定の軍事能力は、兵農分離型の足軽鉄砲隊とその長期遠征を物質的に支える兵站・補給の計画的に整備されたシステムに基づいていた。秀吉軍が開戦初期に一気に平壤や満州のオランカイまで進出することができたのも、ひとえにこのシステムがあればこそのことであった。これなくしては、いかに朝鮮王朝側が無抵抗であるからといって、そのような急速な軍事展開は不可能なのである。李舜臣の水軍は、この秀吉軍の軍事能力の根幹部を叩き折ってしまったということである。内陸部における義兵によるゲリラ活動は、さらに秀吉軍の兵站・補給問題を困難にしていた。こうして秀吉軍はその戦闘能力を低下させ、戦意を衰えさせていくとともに、朝鮮の慣れぬ酷寒の中で慢性的に兵糧の欠乏に悩まされることとなった。」と述べる。しかし、加藤清正・鍋島直茂は咸鏡道へ侵攻していたが、東海岸を北上して補給を受けた事実もないし、計画もなかったようである。

さて、李舜臣の第4次の出撃は日本軍の一番の根拠地・釜山である。「釜山は賊の根本也、進みて之を覆せば、賊、必ず拠りどころを失なわん」と諸將に説いて、8月24日、全羅左水營を出動、自らの兵船に全羅右水使李億祺・慶尚右水使元均の麾下の兵船を合わせ166隻で釜山浦へ侵攻したのは9月1日だった。釜山では日本の兵船470隻ほどが碇泊していた。「我が兵威を以て、今もし討たずして師を還せば、彼の賊はかならず軽侮の心を生ずるであろう」と言った（釜山破倭状）というが、彼等朝鮮水軍に突入せず、引き返すという選択肢もあったのか、と驚く。日本の水軍はほとんど船を出さず、陸地から銃撃によって抵抗した。亀甲船を前面に迫撃し、100余隻を沈めたが、朝鮮水軍は亀甲船によって最前線で戦っていた鄭運が砲弾の直撃を受けて戦死した。鄭運を打ったのは朝鮮製の鉄丸だった。日本軍が捕獲した朝鮮の武器で、しかも朝鮮人が打ったともいわれる（金竜煥, p.195）。朝鮮水軍が日本船から捕獲した戦利品に朝鮮製の各種兵器が含まれていた。

李朝実録（宣祖修正実録）に「李舜臣等、釜山の賊屯を攻めて克たず」と記すように、李舜臣は「終日憤

撃し、賊船百有余隻を撞破し、賊の心を摧き胆落させ、首を縮めて恐怖させた」と報告しているが、倭軍の本拠を覆す、という目的は達成できなかった。鹿島万戸鄭運の戦死に、李舜臣は「国家が右腕を失った」と痛惜したという。韓国人歴史家は釜山浦海戦を朝鮮側の勝利とする。例えば、李啓煌は、「釜山浦海戦で日本水軍は敗北し、日本軍と九州との連絡路が絶たれる危険性が増大した」と書く。それを事実としても、肥前名護屋－釜山のルートは遮断されなかった。李舜臣らの釜山攻撃が成功だったというのなら、なぜ、第二、第三次の攻撃を継続して釜山の日本軍を全滅させるまで攻撃を行わなかったのか。百余隻を撞破したのだから、同様の攻撃を何度も行えば、日本船を全部沈められたのではないのか。ところが実際には李舜臣は二度と釜山への侵攻を行っていない。李舜臣の「釜山破倭状」によれば、釜山城内の官舎は残らず撤去され日本風の建物に換えられ、300以上の家が軒を連ね白壁をめぐらし寺院のような堂宇も見える。この様子を見て李舜臣らは憤慨して倭賊の巢窟となった釜山を焚蕩しなければならぬと決意したという。ならば、なぜ2度と釜山を攻撃に来なかったのか。一つには釜山浦海戦での朝鮮側の損害が大きかったことが推測される。もう一つは日本側の戦略の転換であろう。7月14日付脇坂安治宛の秀吉朱印状などに見る通り、九鬼義隆・加藤嘉明と協力して巨濟島に城砦を築き在番するよう命じ、朝鮮水軍との個別の海戦を禁じ陸上兵と協力して対処するよう指示した。釜山の西側の熊川や安骨浦、その南の巨濟島と加徳島などに城砦を築いて、朝鮮水軍の航行を脅かした。李舜臣は容易には釜山に近づけなくなった。李舜臣が次に麗水を出撃して日本軍を攻撃に向かったのは、つまり第5次の出撃は翌年2月だった。元均・李億祺とともに熊川をもっぱら攻撃した。日本水軍は船を沖に出さず、陸上と協力して防御したため、5度に渡る攻撃にも関わらず、熊川の日本軍を撃滅することはかなわなかった。肥前名護屋と釜山をつなぐ補給路が遮断されることは無かったのだ。

北島万次『豊臣秀吉の朝鮮侵略』、中野等『文禄・慶長の役』、李焜錫『壬辰戦乱史』などには水陸併進策というのは出てこない。中野の『秀吉の大陸侵攻と軍令』、「唐入りと兵站輸送」「朝鮮侵略戦争における海上輸送の展開について」などの文献でも秀吉の軍令に西海岸北上を命じる朱印状などは出て来ないし、李焜錫の大著『壬辰戦乱史』上巻に「日本軍の侵攻作戦指導」の説明があるが、水陸併進策というのは出て来

ない。

徳富蘇峰の『近世日本国民史』（7巻, p.560）で、秀吉が「水軍そのものを極めて軽視していた」という「彼は、少なくとも戦争の初期に於いて、我が水軍をもって、名護屋・釜山間の、運送船の援護をなすべきものとした以外には、殆ど他に任務のあるべきを期待しなかった」と指摘している。

海上知明（2020）『本当は誤解だらけの戦国合戦史』で「朝鮮水軍が軍船をだしてくるのに対して、日本側は兵員と物資の輸送を考えて水軍を編成しているのですから、振るわないのも当然です」（p.250）と述べる。

もしも水陸併進作戦を進めようとするのなら、船手衆の脇坂・藤堂・九鬼・加藤嘉明らを上陸させて内陸部で働かせたりせず、李舜臣の第1次の慶尚道への出撃をまたず、日本水軍から全羅道の海域への航行をおこなっていたのではないか。慶長2年の第二次侵攻のときも、これら船手衆が漆川海戦で大勝したあと、内陸部の南原城攻略に参戦したりせず、一気に全羅道西岸へと進出するのではなからうか。

Ⅲ・結論と補足的考察

やはり、小西行長のいう日本の舟師十万が西海岸を北上して来る、というのは彼のブラフ（ハッタリ）であり、国王に付き添って義州に滞在中の柳成龍にとっては現実味を帯びた脅迫と感じたのではないか。自分の推薦で全羅左水使に就任した李舜臣の奮闘によってその恐怖が除去されたので、李舜臣の功績を実際より過度に高く評価したのではないだろうか。韓国、そして日本の歴史家や著述家が柳成龍の叙述に準拠してこの戦役を記述して来たのではないだろうか。

鄭杜熙（2008）によると、文禄・慶長の役、壬辰倭乱が終結した宣祖王の治世ではこの戦役における武勲の評価としては李舜臣、権慄、元均が「宣武一等功臣」とされた。その後、歴代の国王の治世を経るにしたがって李舜臣の功績の評価が高まり（「忠武」と諡号されたのは1643年、仁祖王の時）、18世紀末の正祖の時代に最高に達したという。1795年、領義政（総理大臣）の位が追贈され、『忠武公全書』が刊行・配布された。日本統治時代も独立運動家と親日派と呼ばれる人々からも民族の模範として賞賛・追慕される。興味深いことに、李舜臣のカリスマ性を強調するあまり、作り話も加わる。明国の神宗皇帝から都督に任じられ賜ったとされる八賜品（水軍の長官であることを

示す都督印、印箱、指揮権の象徴である令牌、刀2点、旗2点、喇叭）が李舜臣を祀る忠烈祠に伝わり、日本人の著書に写真入りで紹介されているが、近年になって実は全部後世の偽物であることが判明した（中央日報2014年11月7日）（注2）。また、韓国海軍は李舜臣が活躍した半島南岸の閑山島沖の海底から当時の銃筒が見つかったと発表、早速、国宝274号に指定された。これも4年後に、現役将校と古物商がでっち上げた偽物であることが判明し、国宝指定が取り消された（別黄字銃筒捏造事件）。

韓国のみならず日本でも李舜臣の人気は高い（注3）。藤居信雄『李舜臣覚書』、片野次雄『秀吉と李舜臣』などは李舜臣讃歌という印象を受ける。笠谷・黒田（p.112）は李舜臣の釜山突入を記述する際に、「李舜臣の『壬辰状草』に記された状況を見ても、秀吉軍が8月中に逃遁しつつあったことは明らかである」と述べるが、これは李舜臣の言う事なら真実であろう、とする思い込みではないか。李炯錫（上巻p.811）によれば、この時、内陸部の日本軍が南の方向へ移動していたのは事実だが、退却ではなく、晋州城攻略と釜山守備強化の為だったとして、「敵情の正確な把握は難しい」と感想を述べている。

注1：倉谷昌伺（2017）は「倭の水軍を壊滅させた」、「16万の陸上兵力の補給路を断った」といいつつ、「倭軍の本土からの兵糧などの海上輸送は名護屋－釜山の1ルートとなり……」と記述するが、名護屋・釜山のルートが有れば、「補給路を断った」とは言えないだろう。

注2：中央日報の報道によると、韓瑞大学のチャン・カンヒ教授は八賜品すべて後世の偽作であると結論、学術誌『歴史民俗学』46号に掲載。

注3：金泰俊「日本における李舜臣の名声」、宋判権「旧日本軍関係文書に見る李舜臣像」等参照。

文献等

イ・インソクほか（2013）『世界の教科書シリーズ（39）検定版・韓国の歴史教科書「高等学校韓国史」』明石書店

小川隆章（2021）「文禄・慶長の役における稷山の戦いに関する韓国歴史教科書の記述の誤りについて」環太平洋大学紀要18号, p.207-213.

- 小川隆章 (2022) 「文禄・慶長の役における鳴梁海戦に関する文献総覧」 環太平洋大学紀要19号, p.89-98.
- 小川 雄 (2020) 『水軍と海賊の戦国史』 平凡社
- 笠谷和比古・黒田慶一 (2000) 『秀吉の野望と誤算 文禄慶長の役と関ヶ原合戦』 文英堂
- 上垣外憲一 (1989) 『空虚なる出兵, 秀吉の文禄・慶長の役』 福武書店
- 上垣外憲一 (2002) 『文禄・慶長の役 空虚なる御陣』 講談社学術文庫
- 韓国教育部編 (2003) 『世界の教科書シリーズ 1 新版・韓国の歴史「国定韓国高等学校歴史教科書」』 明石書店
- 北島万次 (1995) 『豊臣秀吉の朝鮮侵略』 吉川弘文館
- 北島万次 (2000) 「壬辰倭乱における李舜臣の海戦について」 『青丘学術論集16号』 p.5-61.
- 北島万次 (2002) 『壬辰倭乱と秀吉・島津・李舜臣』 校倉書房
- 北島万次 (2017) 『豊臣秀吉朝鮮侵略関係資料集成 1』 平凡社
- 金泰俊 (1981) 「日本における李舜臣の名声」 『比較文学研究』 40号 p.20-33.
- 金泰虎 (2002) 「文禄・慶長の役における朝鮮半島南岸構築の倭城に見る役割と機能」 『地域と社会』 5号 (大阪商業大学) p.61-92.
- 金竜煥 (1979) 『亀甲船海戦記・海の覇者李舜臣』 成甲書房
- 倉谷昌伺 (2017) 「朝鮮水軍の変遷と倭の水軍への対応」 軍事史学会 『軍事史学』 53巻 1号 p.107-129.
- 近衛龍春 (2021) 『脇坂安治・七本鎗と水軍大将』 実業の日本社
- 島津亮二 (2010) 『小西行長』 八木書店
- 関 周一 (編著) (2017) 『日朝関係史』 吉川弘文館
- 宋讚燮・洪淳権 (藤井正昭・訳) (2004) 『世界の教科書シリーズ⑨概説・韓国の歴史 韓国放送通信大学校歴史教科書』 明石書店
- 宋判権 (2007) 「旧日本軍関係文書に見る李舜臣像」 『鳥取短期大学北東アジア文化研究』 25号 p.36-52.
- 朝鮮研究会 (1916) 『李舜臣全集』 朝鮮研究会
- 鄭杜熙 (2008) 「李舜臣に関する記憶の歴史と歴史化」 鄭杜熙ほか編著 『壬辰戦争16世紀の日・朝・中の国際戦争』 明石書店 p.209-262.
- 徳富猪一郎 (蘇峰) (1964) 『近世日本国民史 7 朝鮮役 上巻』 時事通信社出版局
- 徳富猪一郎 (蘇峰) (1964) 『近世日本国民史 9 朝鮮役 下巻』 時事通信社出版局
- 中里紀元 (1993) 『秀吉の朝鮮侵攻と民衆・文禄の役』 文献出版
- 中野 等 (1990) 「朝鮮侵略戦争における海上輸送の展開について」 九州大学国史研究室 『近代近世史論集』 吉川弘文館 p.27-50.
- 中野 等 (2003) 「唐入りと兵站輸送体制」 池享・編 『日本の時代史13天下統一と朝鮮侵略』 吉川弘文館 p.195-233.
- 中野 等 (2006) 『秀吉の軍令と大陸侵攻』 吉川弘文館
- 中野 等 (2008) 『戦争の日本史16 文禄・慶長の役』 吉川弘文館
- 藤居信雄 (1982) 『李舜臣覚書』 古川書房
- 海上知明 (2020) 『本当は誤解だらけの戦国合戦史』 徳間書店
- 李炯錫 (1977) 『壬辰戦乱史 (上・中・下巻)』 東洋図書出版
- 李啓煌 (2014) 「朝鮮から見た文禄・慶長の役」 大津透ほか編 『日本歴史第10巻近世 1』 岩波書店 p.100-134.
- 李舜臣 (若松實・訳) (1991) 『乱中日記』 日朝協会愛知県連合会
- 李舜臣 (北島万次・訳) (2001) 『乱中日記 3 - 壬辰倭乱の記録』 平凡社東洋文庫
- 柳成龍 (朴鐘鳴・訳注) (1979) 『懲毖録』 平凡社東洋文庫